

# カントの趣味判断について

利 光 功

基礎教育課程

## Über das Kants Geschmacksurteil

TOSHIMITSU Isao

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 13, 2000 ; Accepted January 19, 2001)

### はじめに

18世紀のヨーロッパは、伝統的な権威や偏見、迷信や俗信を批判することによって、それらの蒙昧から解放された啓蒙の時代と言われている。批判精神として啓蒙の主角を担ったのは言うまでもなく理性であるが、理性による批判は感性の領域にも向けられると同時に、また感性自体の役割についてもある程度の認識が広がっていった。その成果は、ほかならぬ啓蒙時代にフランスやイギリスに台頭してきた趣味論や美論、とりわけドイツで誕生した感性的認識の学としての美学にみることできょう。

ところでドイツ啓蒙時代の批判精神の最終的の代表者カント (Immanuel Kant, 1724-1804) が、理性による理性自体の批判を行ったのは言うまでもない。『純粋理性批判』(1781)と『実践理性批判』(1788)がそれであるが、カントはまた感性の批判も行ったと言える。ただし感性の批判とは言わず、判断力の批判と言ひ、そのなかに美についての判断力を含めるかたちで行った。『判断力批判』(Kritik der Urteilskraft, 1790)の第1部、「美的判断力の批判」(Kritik der ästhetischen Urteilskraft)のことである。

カントが理性の批判を行うにあたり、ヒュームなどのイギリス経験論の知見を採り入れて、ライプニッツ＝ヴォルフ派の形而上学を批判したことはよく知られているとおりであるが、美的判断力の批判を行うに際してもまたイギリス経験論の趣味論や美論の知見を採り入れた。これは美についての判断を趣味判断と捉え、美的判断力の批判を趣味の批判として展開したところによく窺える。ただしカントは趣味の批判のもとに、パウムガルテンのいう感性的認識を批判したのではなく、趣味による判断は経験的判断に過ぎないとするイギリスの趣味論を

批判し、趣味判断にはア・プリオリな根拠があるとしたのである。

趣味 (taste, goût, Geschmack) は、もともとは味覚を意味する言葉であるが、これを詩や絵を味わう感受能力へと広げて用いたのはスペインの作家グラシアン (Balthasar Gracian, 1601-58) であるとされている。すなわち彼の著作が (趣味はスペイン語では gusto) がフランス語、そして英語に翻訳されて、17世紀後半からフランスと英国、そして後にはドイツでもこの広げられた意味での趣味が論じられるようになった。中世の諺に「趣味については議論できない」(De gustibus non disputandum) とあるのに、議論されるようになったのである<sup>1)</sup>。これを受けて『判断力批判』の第1部のなかで、カントは趣味判断という用語を頻繁に使用している。しかしカント以後、ドイツの哲学者は趣味判断ないし趣味という用語を、全く使わなくなった。ほとんどこの用語の使用を避けていると思われるほどである。

これはもとより簡単に考えればカントに続くドイツ観念論の哲学者の問題意識が別の方向へ向けられ、趣味について論じなかったということに過ぎないが、うがった見方をすれば、カントが、18世紀に盛んにおこなわれた趣味論を集大成し、譬えて言えば、趣味判断を柱として大きな建物——神殿と言ってもよいような——を建ててしまったからだとも考えられる。実際この建物はさまざまな概念を使用して緻密に組み立てられており、容易なことでは近づけず、カント以後の哲学者はこの建物の仕組みをあれこれ探索するだけで、趣味の問題については、この建物によって一応の決着がついたとみなしてしまったかのようにも思える。

しかし私には、一見したところ堅固に作られている趣味の神殿も、子細にみればいろいろの所から寄せ集めた材料を釘で強引に打ちつけて——牽強附会の論理でもっ

て——建てたぎくしゃくした建物にみえる。そもそもこの建物の土台をなすのは、自然の合目的性 (die Zweckmäßigkeit der Natur) であるが、これが趣味判断のアープリオーリの根拠などではないとすると、この建物は壮大な空中楼阁のようにみえる。建物の材料に経験的事実も多く使われているから空中楼阁というのは言い過ぎであるが、建物の構築が整然としていないことは否定できない。

しかし今はこの問題は置いておいて、カントの趣味概念について、イギリス経験論の美論・趣味論からどのような概念を継承し、どのような概念を捨てて、自己の思考の装置としたのか、ささやかな検討を行うだけに留めておきたい。

## 1. 趣味判断と無関心性

『判断力批判』の本文は、第1部、美的判断力の批判、第1編、美的判断力の分析論、第1章、美の分析論、趣味判断の質の点からみた第1契機、第1節、趣味判断は直感的である、と表題が続いてから、始められている<sup>2)</sup>。この表題にみえる趣味判断 (Geschmacksurteil) の言葉には注が付けられていて、「趣味とは美の判定の能力である」と定義されている<sup>3)</sup>。従ってカントが盛んに用いる「趣味判断」(Geschmacksurteil) とは美の判定能力による判断のことであり、第1節では趣味判断が認識判断 (Erkenntnisurteil) ではないこと、すなわち論理的ではなく直感的であることが主張されている。

この「趣味とは美の判定の能力である」という定義は、おそらくエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) の趣味の定義を受け継いだものとしてよいであろう。バークは『美と崇高の観念の起源についての哲学的研究』第2版 (1759) の冒頭に趣味論を付け加えたが、そこでは「しかしあら捜しのあらゆる口実を絶つために言えば、趣味という言葉でもって私が意味するものは、ただ想像力の作品と優雅な芸術によって触発されるか、あるいはそれらに関する判断を作り上げるところの、心のひとつまたはそれ以上の能力 (faculty) のことに過ぎぬということである」と述べている<sup>4)</sup>。実際カントは『判断力批判』のなかで、バークのこの書のドイツ語訳の書名を上げて、バークを美と崇高についての経験的説明の「最も優れた著者」と紹介している<sup>5)</sup>。『判断力批判』の第1編、美的判断力の分析論が、第1章、美の分析論と、第2章、崇高の分析論から成り立っているのも、バークの前掲書の直接的影響であるということまでもない。周知のようにカントの初期の著作『美と崇高の感情に関する観察』(1764) が、そもそもバークの著作に刺激されて書かれたものであった。

それはよいとして、趣味を美の判定能力とする簡単な定義には、いささか違和感を抱かざるをえないのではなかろうか。というのは趣味は一般にある対象を美として受け取る能力、いわば受動的な感受性と考えられていたからである。判別の能力とは受動的な能力ではなくて、能動的な能力であろう。カント自身「ひとつの規則正しい合目的な建築物を、その(主観の)認識能力をもって把握することと、その表象を満足の間受ける感覚をもって意識していることとは、全く別である」と述べ<sup>6)</sup>、この後者のばあい、表象は主観の快・不快の感情 (Gefühls der Lust oder Unlust) へ関係づけられているとしており、このような感情に浸っている意識が、どうして能動的な判別能力たりうるのであろうか。しかしこれは趣味を感覚と想像力と判断の作用とみるバークの趣味概念が、そもそもイギリスのジョーン・デニスらに始まる伝統的な趣味概念——詩を味わう感覚、あるいは受動的な感受性——とはいささか異なるのであって、カントはバークを単に受け継いだけと解しておこう。趣味概念について、カントとバークの違う点は、バークが判断がつくられる対象として芸術作品を上げているのに対し、カントは判定の対象を単に美としている点である。この美は後の第16節で明らかにされているように花や小鳥などのいわゆる自然美であって、芸術美が主眼となっているわけではない。これからすればカントの趣味概念はデニスらの伝統的なイギリスのそれとは二重の意味で離れていると言ってよい。

ついで第2節から第5節までは、趣味判断のいわゆる無関心性が説かれている。すなわち第2節の表題は、「趣味判断を規定する満足はあらゆる関心を欠く」であり、カントはこれを重大なる意義を有する命題としている。この命題の意味は比較的簡単であって、ある物を美と判定するのは、単なる観照 (Betrachtung) における判定であり、その満足にその物に対する利害関心は入り込まないということである。例えばリングを美しいと判定しているとき、その満足はただ観照における満足であり、そのリングを食べたいといったような欲求とは無関係であると言うのである。そして第3節、快適 (das Angenehme) についての満足は関心と結合する、第4節、善 (das Gute) についての満足は関心と結び付く、第5節、三つの特性的に異なる満足の種類の比較、の三つの節を通して、美の満足が関心と結び付かないのに対して、快適と善の満足は関心と結び付くとし、この理由により両者は美と明確に区別されるとしている。そして最後に趣味の一層詳しい定義が出されているが、それは次のようなものである。「趣味とはあらゆる関心なくして、ある対象もしくはある表象方式を、満足もしくは不満足によつ

て判定する能力である」<sup>7)</sup>。

この定義をいささか不分明にしているのはある対象 (Gegenstand) とある表象方式 (Vorstellungsart) を並べているところであろう。対象だけならば問題はないのに、表象方式というはっきりしない概念を並べて用いているため、この定義はいささか曖昧さがつきまとっていると言ってよい。しかし表象方式なる概念の解明は、かなりの説明を要するのでここでは触れないことにする。

この美の無関心性の主張は、カントはそれとは断っていないが、ハチスン (Francis Hutcheson, 1694-1746) の考えを受け継ぎ採り入れたものとしてよい。ハチスンは『美と徳の観念の起源に関する研究』(1738) のにおいて、美の感覚の快が、利害 (Interest) や利益 (Advantage) の予想から生ずる喜びとは異なることをつぎのように主張している<sup>8)</sup>。「そしてさらに、美と調和の観念は、他の感覚的観念と同様、直接的に私たちに快いとともに必然的にもそうである。私たち自身のどんな決心も、有利不利のどんな予想も、対象の美醜を変えることはできない。というのは、外感覚の場合と同じく、利益の見通しがある対象を感覚に対して喜ばしくし、また知覚のなかにある直接的な苦とは別に、有害の見通しがそれを不快にすることもないと思われるからである」<sup>9)</sup>。

ここで一寸触れておきたいのは、快適の具体的内容である。カントは快適の概念を知覚において感覚に満足を与えるものと定義している。そして感覚には、それによって事物が表象される客観的感覚と、何の対象も表象されない主観的感覚 (感情) とに区別されるとする。しかしこの感覚が、普通に我々が意味する視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚のいわゆる五感とどう関係するのか言及されていない。そこでカントが実際に上げている例をみると、第4節では香辛料のきいた料理 (Gerichte) と健康 (Gesundheit) である。この前者が味覚の快適であることはいうまでもない。健康は苦痛がないという意味でそれを所有している者には快適だと言われている。これは身体感覚としての痛感覚を伴わない消極的な快適である。つまり積極的な快適としては、味覚におけるそれしか上げられていない。飲食によって対象の存在が消滅するのであるから、これが利害関心と結び付くことは言うまでもない。ただし後の第7節においては、「カナリア酒はうまい」という味覚以外に、すみれ色と管楽器や弦楽器の音という視覚と聴覚にとっての快適の例が上げられているけれども、基本的には快適として味覚が、すなわち言葉のもととの意味での趣味が考えられているとしてよいであろう。

## 2. 感官趣味と反省趣味

さて第6節から第9節までは、量の点からみた趣味判断の第2契機であり、ここでの論考の主題は、第6節の表題、「美とは概念なしに普遍的満足の客体として表象されるもののことである」に端的に示されている。カントの説明するところでは、ある事物について感ずる満足に何の関心も含まないということは、判断者がその満足に関して全く自由であることを感じていることであり、その満足の根拠は、自己のみにかかわる私的条件に置くわけにはいかず、どのような他人にも前提されるものにあると見做すしかない。すなわち判断者は自分と同じ満足をあらゆる人に対して期待できる理由があると言うのである。趣味判断にこの主観的普遍性への要求が結び付いていることは、続く第7節でなお詳しく説明されているが、第8節まで読み進めていくと、カントは趣味を二つに分けている。すなわち趣味に二種類あるとする。いささか長くなるがその箇所の文を引用する。

最初にまず十分に確認しておかなければならないことは、(美についての)趣味判断によって、ある対象についての満足をあらゆる人にあえて要求されるが、それでもこの満足は概念に基づかない (概念に基づくならば、それは善であろうから) ということ、そしてこの普遍妥当性への要求は我々があるものを美しいと言明する判断に本質的に属しているのであるから、判断に際して普遍妥当性を考えなければ、誰ひとりこの表現を使用することを思いつかず、むしろ概念なしに満足を与えるものはすべて快適なものに数え入れられることになるであろう。この快適なものに関しては、人は各人がそれぞれ独自の意見をもつことを許し、そして誰も他の人に自分の趣味判断に対する同意を期待することはない。ところがこの同意は、美のついでに趣味判断においてはつねに生じるということである。私は前者を感官趣味 (Sinnengeschmack) と呼び、後者を反省趣味 (Reflexionsgeschmack) と呼ぶことができると思う。ただしこれは、前者は単に個人的判断であり、後者はいわゆる共通妥当的 (公共的) 判断であるが、しかし両者共に、ある対象について、単にその表象と快・不快の感情との関係の上から直感的 (実践的ではない) 判断を下す限りで、そう呼ぶことができるのである<sup>10)</sup>。

このように一口に趣味といっても快適についての趣味と美についての趣味の二つに分けられると主張するのである。美についての趣味、最初に定義した美の判定能力としての趣味は、実はここでいう反省趣味であったわけ

である。

感官趣味については、前述したように快適を知覚において感覚に満足を与えるものをいうのであるから特に問題はない。この趣味について、カントは伝統的な「趣味については議論できない」という立場をとる。この趣味判断は、カナリア酒はうまいといった味覚上の判断ばかりでなく、すみれ色がある人には柔らかで好ましいのに、他の人にはそうではないとか、ある人は管楽器の音を好むのに、他の人は弦楽器の音を好むといった視覚や聴覚による判断にしても、それは個人が私的な感情に基づいて判断していると言うのである。したがって個々人は、他人が口を差し挟めない固有の趣味を持っているとされている。

それに対して反省趣味については、判断の対象——第7節では具体的に建築物、衣服、交響曲、詩(das Gedichte)が上げられている——を、私にとって美であると言っではならないという。「だから単にある個人にのみ満足を与えるものならば、それを美と呼んではならない」(Denn er muß es nicht schön nennen, wenn es bloß ihm gefällt.)と言うのである<sup>11)</sup>。つまり判断者は単に自分個人に対してだけ判断を下しているのではなく、あらゆる人に対して判断しているのである。そこからある事物を美しいとする判断には、他者が一致することを要求すると言うのである。この場合もしも他人が別の判断を下したならば、当然あると期待していた趣味がその人には無いと断定する。そしてその限り、個々人が自身の趣味を持っていると言えない。持っていると言うと、それはそもそもいかなる趣味も存在しない、すなわちあらゆる人の賛同を合法的に要求できるような直感的判断は存在しないということに等しくなってしまう、と主張する。

このカントの主張に従うならば、快適を判定する感官趣味は我々の皆がもっているが、美を判定する反省趣味は持っている者と、欠けている者がいることになる。感官趣味については、その判定が人々の間で一致することがあるけれども、一致しなくても差し支えない。しかし反省趣味については、それを持っている者は、自己の判定に他人が同意することを要求できると言うのである。しかしこの点については誰しも疑問を抱くのではなからうか。私がある対象を美と判定しても、他人に同様に判定するように何を根拠に正当に要請できるであろうか。

この問題については後で取り上げることにして、そもそもカントの反省趣味なる概念について私はいささか違和感を覚える。というのは反省という概念と趣味概念はそもそも結びつかないのではないかと思うからである。反省とは普通、熟考とか省察の意味であり、論証的な知力の活動をいうであろう。実際カントは『判断力批判』

の他の箇所では、反省する活動を判断力と結び付けており、これならば理解でしょう<sup>12)</sup>。ところで反省趣味なる概念をカントはどこから思いついたのであろうか。もちろんイギリスの趣味論・美論のなかに、反省趣味なる概念は登場しない。しかしこれは私にイギリス経験論の反省概念を思い出させると同時に、反省の対象としての内感覚を思い出せる。そして反省趣味にやや近い概念としてハチスンの内感覚の概念が浮上してくるので、これについて検討を加えてみよう。

### 3. ハチスンの内感覚

この内感覚(internal sense)は、もともとイギリス経験論の哲学の創始者ロック(John Locke, 1632-1704)が、観念の起源として、外的対象の知覚に由来するものと並んで、反省と呼ぶ心の内的活動に由来するものを上げ、その反省の対象を指したところに始まる。周知のようにロックはデカルトなどの主張した生得観念(innate ideas)を否定し、我々の心はもとは白紙であって、あらゆる観念は経験から、すなわち知覚(sensation)と反省(reflection)からもたらされると経験的認識論を展開したのであった。この反省からもたらされる観念について、「この観念の起源は、すべての人が自分自身の内にもっており、外的対象と関係がないので感覚ではないけれども、感覚に非常によく似ているので、正当に内感覚と呼ばれてよい」と述べている<sup>13)</sup>。

このロックの認識論の概念装置を受け継いで、「人間性が受け取ることのできる様々な快(Pleasures)について研究」したのがハチスンの前掲書であるが、ハチスンにおいては、次の序文のなかの一節にみられるように、内感覚は最初から美を受け取る感覚として特定されている。

我々の観察に生起する形式ないし観念によって快を与えられるべく決定するものを、著者は感覚(Senses)と呼ぶことにする。普通、感覚と呼ばれる能力と区別して、規則性、秩序、調和の美を認める我々の能力を内感覚と呼ぶ。そして我々が有徳なと呼ぶ理性的行為者の感情、行為、あるいは性格を肯認するべく決定するものを道徳感覚(Moral Sense)とする<sup>14)</sup>。

ロックにおいて内感覚は様々な観念の起源であるのに、なぜハチスンは内感覚を「美を知覚するわれわれの力(power)である」と特定化してしまったのであろうか。ハチスンもロックと同様に観念の起源をまずは外的対象の知覚に由来するとする。そこで美の観念は視覚と聴覚の外感覚(external senses)の知覚(perceptions)に求

められる。ところが外感覚の知覚力は、人間のみならず動物も等しく持っており、時には動物のほうが一層鋭敏でさえある。しかし美を認知する「高尚な知覚の能力」を少しでも備えた動物は全くとはいわないまでもほとんどいない、と言うのである。そこでこの高尚な知覚の能力を内感覚と呼んで区別するならば、これはおのずから美を知覚する力に特定されることになる。

さらに内感覚を「美の観念を知覚する能力」に特定したもうひとつの理由は、外感覚がほとんど関わらないと考えられるものから、すなわち知覚せずともおそらく持つことのできる見る聞くといった感覚内容から、美の観念を受け取ることができるとするからである。具体的には、ピュタゴラスの定理や普遍的真理や行為の原理の美である。これらの美の知覚に外感覚はほとんど関わらない。それにもかかわらずこれが感覚であるのは、外感覚の場合と同じく、美の快が直接的かつ必然的であるためだと言うのである。

その結果、ハチスンにおいては、「美の観念を知覚する我々の力である」ところの内感覚は、また美の感覚 (a Sense of Beauty) とも呼ばれている。

以下の論述において、美という言葉は我々のうちに惹き起こされた観念の意味、そして美の感覚とはこの観念を受け取る我々の能力の意味にとられていることに注意して頂こう<sup>15)</sup>。

このようにハチスは内感覚を理性や意思とは独立した人間に固有な能力として認めており、これをまた鋭敏な才能とか趣味とかよい耳とも呼んでいる。

このような快い観念を受け取る、この優れた能力を我々は普通鋭敏な才能 (a fine Genius) あるいは趣味と呼ぶ。音楽においては我々は一般に聴覚という外感覚とは性質が異なる感覚のようなあるものを知っているように思え、それをよい耳 (a good Ear) と呼んでいる<sup>16)</sup>。

さて内感覚による美の知覚において、その感覚の快が利害関心や利益の予想から生ずる快と関係のないことは前に触れた。ハチスはさらにわれわれに美の観念を呼び起こす形態 (Figures) が、多様のなかの均一性 (Uniformity amidst Variety) であるとする。その具体的対象として、ハチスは自然界の動植物のみならず、数学や物理学の定理、音楽の協和音や建築・庭園のような芸術作品を上げていく。ただし芸術作品のなかでも絵画や彫刻や詩は、多様のなかの均一性を模倣したもの、ないし写したものであるから、それらの美は原型 (Original) と

写し (Copy) との一致にあるとして、これを相対美 (Relative Beauty) と呼んでいる。

そしてハチスは内感覚すなわち美の感覚が、人間においては普遍性 (Universality) を有することを主張する。もちろんハチスはロックの所論を受け継いで、美の観念が生得観念でありえないとする。そこで「多様のなかの均一性に由来する美の感覚における人類の普遍的一致については、我々は経験に照らしてみなくてはならない」<sup>17)</sup>わけである。ところが経験に照らしてみるならば、外感覚においても内感覚においても、我々が下す判断が一致しないことは明らかであろう。これについてのハチスの説明はつぎのようなものである。まず外感覚については、趣味の多様さという言い方をせず、嗜好 (Relish) ないし好み (Fancy) の多様さという言葉づかいをした上で、これがもって生まれた知覚の能力ではあるものの、習慣、習性、教育によって強められたり弱められたりするから好みの多様さを生むことは確かであり、「外感覚の好みなし嗜好を何らかの一般的な基礎へもたらすこと、あるいは快適なもの (the Agreeable) や不快なものについて何か規則を見出すことは、ますます困難であり、おそらく不可能であろう」<sup>18)</sup>と言うのである。しかし内感覚については、すでに前述したように外感覚とは異なった高尚な感覚なのだが、改めて「内感覚とは多様のなかの均一性のあるすべての対象から美の観念を受容する受動的な能力である」<sup>19)</sup>と断った上で、美の感覚における好みの外見上の多様さの大きな原因は、観念の連合 (Association of Ideas) であると言うのである。すなわちしばしば人はひとつの強い情念 (Passion) に動かされたとき、ひとつの観念から連合して多くの観念が生じるのであり、それらは美とは別種の観念なのであるとする。例えば非常に美しい場所が、ある人にとって過去の悲しみ舞台であったならば快いものではありません。美とは違った様々な観念を引き起こすと言うのである。そしてハチスは美の感覚の普遍性の究極的原因として、自然の創造主 (Author of Nature) あるいは神 (Deity) が多様のなかの均一性から美の観念を生じせしめるように内感覚をそう定めたのだと論じるのである<sup>20)</sup>。

#### 4. 趣味判断の普遍性の要求

カントの趣味判断の思想が、それとは明確に言及していないけれども、このハチスの美論を受け継いでいることは明らかであろう。カントの反省趣味の概念がハチスの内感覚の概念に近似し、感官趣味の概念が外感覚のそれにほぼ該当するとしてよい<sup>21)</sup>。問題はハチスンが内感覚すなわち美の感覚の普遍性を経験によってしか検証できないとしながらも、最終的には自然の創造主とい

う超越的原理を持ち出して解決しているのに対し、近代人であるカントはかかる超越的原理を持ち出せなかったことにある。そこで「自然の合目的性」という原理を導入したのであったが、その限りでは、これは自然の創造主のいわば身代わりと言えよう。実際、表目には創造主あるいは神は出ていないが、「自然の合目的性」なるものは裏に創造主あるいは神がいてこそ初めて成り立つ原理であって、身代わりの機能を果している。そしてこの原理をもって趣味判断のア・プリオーリの根拠とし、その主観的普遍性を説くところにカントのなみなみならぬ苦心があったわけで、私はその努力に敬意を払うものの、以下に指摘するような同調しがたい強引な論理があることも認めざるをえない。

それはさておきカントは前述したように趣味を感官趣味と反省趣味に分け、前者の判断対象を快適、後者のそれを美としたのであった。ここで快適といわれるものが感覚的な快であることは言うまでもないが、美は快とどうかかわるのであろうか。ハチスンの場合は明解に美は感覚の快であるとされている。もっともそうするとハチスンにおいて外感覚の快と内感覚の快はどう違うのかということが問題になろうが、彼は次のように述べて、感覚の快の大小の違いであるとしている。「多くの哲学者たちが考慮していると思われる唯一の感覚の快は、感覚の単純観念に伴うそれであるが、美しい、規則的、調和したという名の冠せられる対象の複合観念には、はるかに大きな快がある。例えば、たとえそれが可能な限り強くそして生気を帯びているとしても、ひとつの色を見ることよりも、きれいな顔、当を得た絵に人はずっと大きな喜びを持つことは誰でもが承認する」<sup>22)</sup>。つまり外感覚の快よりも内感覚の快のほうが大きいのである。さらに外感覚の快は卑しく、一時的なのに対して、内感覚の快は高貴でより永続的である点で区別されている。ただしこのばあい外感覚として臭覚、味覚、触覚が考えられており、美の観念をうけとる外感覚としてはもっぱら視覚と聴覚だけが上げられている点は注意しておく必要がある。

なおハチスンの研究は、人間を幸福にするものは快であり、最も大きくかつ最も永続する快が何であるかを探究することにある。したがって内感覚の快、すなわち美の快よりも、友情、愛、慈善といった道徳的快 (moral Pleasures) のほうが一層大きく永続すると主張する。そして内感覚の快と様々な徳とが結び付いて、美の異なった好み (Fancys) ないし嗜好 (Relishes) が生まれることになるというのである<sup>23)</sup>。

いずれにせよハチスンにおいて美は感覚の快であるが、カントにおいて美と快の関係は明解ではない。これ

は趣味を感官趣味と反省趣味に分け、快適と美とを峻別したことに起因すると思われる。つまりカントに従えば、われわれは二つの趣味を、すなわち快適なものについての判定能力と美についての判定能力の二つ判定能力を持っていることになる。これがハチスンの考えているように、快適なものについての判定能力は、味覚・嗅覚・触覚の外感覚によるものであり、美についての判定能力は視覚と聴覚を基礎とする内感覚によるものとするならば分かりやすい。しかしカントはそのような感覚の種類によってそれらの判定能力を区別しているわけではない。

そこでつぎのような問題が生じることにならないだろうか。すなわちある対象を前にして直感的な判断を下すとした場合、あらかじめその対象が快適なのか美なのか分かっているわけではないから、どちらの判定能力が最初に出動するのか元来は決まっていなかったのではないかという問題である。

ところがこれについてのカントの答えは、美の判定においては快 (Lust) の感情が対象の判定に先行しないと言うものである<sup>24)</sup>。もしもある対象について快の感情が先行するとすると、それは感官感覚 (Sinnenempfindung) における単なる快適なものになってしまうと言うのである。対象についての快は趣味判断の結果としてもたらされと言うのである。

このカントの答えは、どちらの判定能力が先に働くのかというわれわれの問いに答えるものではない。判定能力が働くよりも前に、快の感情が先行する可否かで、対象が美か快適か決まってしまう——つまり判定されてしまう——というのは承服しがたい論理である。それにカントは第1節で、「一つの規則正しい合目的な建築物をその (主観の) 認識能力をもって把握することと、その表象を満足の感覚をもって意識していることとは、全く別である」<sup>25)</sup> と言い、この後者の趣味判断の場合、表象は主観の快・不快の感情 (Gefühl der Lust oder Unlust) へ関係付けられていると述べているが、この主張と、第9節の美の判定において快の感情は対象の判定に先立たないという主張は整合しないと言ってよい。

そもそも判定能力は元来ひとつであり、まさにその能力が対象をその場その場でさまざまに判定すると考えるのが自然ではあるまいか。二つの判定能力があるとするのはカントがもともとひとつである趣味を強引に二つに区別した結果であって、そこに無理があったのである。

にもかかわらずカントは趣味を二つに分けた、というよりも分けなければならなかったのは、反省趣味判断に普遍的妥当性への要求が本質的に結び付いていることを主張するためであった。すなわち美の判定においては、

何らの利害関心も伴わず、概念に基づくのででもなく、判断者個人の傾向性や私的条件に左右されずに、全く自由な境地から判断するのであるから、すべての人が同一の判断を下すべく要求できると言うのである。

このように美についての判断は誰でもが同一の判断を下すべきとされているということは、人はすべて同一の判断能力をもっていることが前提されていると言ってよい。しかしカントはハチスンのように自然の創造者によって人にはみな内感覚が与えられていると言うわけにいかない。そこでカントの提出する一種の主観的原理が共通感覚 (Gemeinsinn) にほかならない<sup>26)</sup>。しかしこの共通感覚は経験的な外感覚や、等しくこの語で言われる常識ではありえない<sup>27)</sup>。なぜなら「これはすべし (ein Sollen) を含む判断を権利付けるものであり、単に皆が我々の判断に一致するであろうと言うのではなく、それに合致すべしと言う」からである<sup>28)</sup>。かといって趣味判断は概念に基づかないので、共通感覚を概念とするわけにもいかず、カントは単なる理想的規範とか不確定的規範とか、あるいは共同的感觉の理念とか一種の判定能力の理念とか言っている<sup>29)</sup>。しかしそうすると規範 (Norm) や理念 (Idee) と概念はどう違うのか、それらも概念の一種ではないのかという疑問がわいてくる。しかしこの問題の検討は別の機会にゆずり、最後に趣味判断のゾレンについて私見を述べておきたい。

カントは趣味判断については、自己の判定に他人が同意することを要求できると言う。あるいは、前に触れたように、単にある個人にのみ満足を与えるものならば、それを美とは呼んではならないと言う。しかしこの点については誰も疑問を抱くのではなからうか。私がある対象を美と判定したとして、他人に同様に判定するように、換言すれば、私の判定に従うように、正当に要請できるであろうか。大体、同様に判定すべしとか、美と呼んではならないというのは、一種の命令であろう。美醜に関するこのような命令は、有効な命令と言えるであろうか。そもそも命令とは意志を強制するものであろう。カントはその道徳哲学で、命令の方式を命法と呼び、「すべての命法はゾレンによって表明される」とし、なにかの目的に対する手段を命令する仮言命法 (hypothetischer Imperativ) と、無条件的道徳命令である定言命法 (kategorischer Imperativ) とを区別した<sup>30)</sup>。他人にある対象を私同様に美と判定するべきだと言うのは、他人の美と判定する行為が、私にとって都合がよいから、仮言命法と言ってよい。また単にある個人にのみ満足を与えるものならば、それを美とは呼んではならない、と言うのも仮言命法である。カントによれば、条件付きの命令である仮言命法は、その目的を承認する人にだけしか意

味がなく、普遍妥当性をもたないのである。したがって道徳命令としての資格をもたないのであったが、我々が問題にしている美醜についての命令が定言命法でないことは明らかであり、したがってそれが普遍妥当性をもたないこともまた明らかであろう。

ともあれカントによれば、ある人がある対象を美と判定するとき、その人は何ら私的条件によって拘束されず、全く自由を感じているという。この自由からどうしてすべきとか、ならぬとかの仮言命法が出てくるのだろうか。趣味判断の場に、このような道徳命令に類するような要求を持ち込むのは、全く場違いの感がするのは私だけであろうか。

## おわりに

趣味判断の形式がどうして道徳判断のそれと類似するようになったのであろうか。本考察は、主として本論第9節までを対象としたものであり、まだ検討すべき問題は多く残されている。とりわけ後のほうのいくつかの節でカントは美と善との経験的な結び付きについて述べており、第59節「道徳性の象徴としての美について」では「美は道徳的善の象徴である」とされていて、『判断力批判』における美と道徳の関係については、別に改めて検討する必要がある。

とはいえここで趣味判断が仮言命法のような要求をもつに至った理由と思われるものを二つ上げておきたい。と言ってもそれは極めて単純な理由なのだが、ひとつは『判断力批判』を書く前、カントはもっぱら道徳問題について考察していたことである。その大いなる成果が『道徳の形而上学の基礎づけ』(1785)と『実践理性批判』(1788)であることは言うまでもない。道徳の哲学的考察で頭が冷めやらぬうちに趣味判断の考察に取りかかったため、そこに道徳命令が知らず知らずのうちに入り込んだと考えられるのである。もうひとつは、カントが道徳について考察する際に、ハチスンの前掲書の第二論文「道徳的善悪についての研究」を参考に使っていたことである<sup>31)</sup>。この第二論文は「美の感覚」を論じた第一論文の理論的展開となっており、「美の感覚」を参考に趣味判断を考えているうちにハチスンの道徳論が連続的に思い浮かび「道徳感覚」と重なってしまったためと考えられるのである。いずれにせよ人間の本質を「善き意志」にみたカントにとって美的判断も道徳的判断と無縁なものではあり得なかったのである。

## 註

- 1) グラシアンからイギリス18世紀における趣味概念の展開については、Hannelore Klein; *There is no Disputing About*

- Taste*, 1967. を参照されたい。
- 2) 第1節の表題、Das Geschmacksurteil ist ästhetisch の ästhetisch の訳は、最初に日本の訳者を悩ませるものであって、さまざまな訳語が考案されてきている。直感的（深田康算、大西克禮）、美学的（篠田英雄）、美感的（原佑、牧野英二）、情感的（宇都宮芳明）などであるが、私は深田・大西訳をとる。そうすると最初にある第1部の表題、Kritik der ästhetischen Urteilskraft の訳は、「直感的判断力の批判」となっているけれども理屈だが、これもやはり深田・大西訳に従い、意識して「美的判断力の批判」とした。なおカントをはじめ後出のバーク、ハチスンらの引用文の訳は、邦訳を参照したが、原則として筆者のものである。
  - 3) Ernst Cassirer (Hrsg.); *Immanuel Kants Werke*, 1922. Bd. V, S. 271. 以下、カントの引用はこのカッシーラ版全集により、巻数とページ数のみ示す。
  - 4) J. T. Boulton (Ed.); Edmund Burke: *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1958. p. 13. 邦訳、中野好之訳『現代の不満の原因・崇高と美の観念の起源』みすず書房、1973、17ページ。
  - 5) Bd. V, S. 349.
  - 6) Bd. V, S. 272.
  - 7) Bd. V, S. 279.
  - 8) Francis Hutcheson; *An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue*, 1725, 4th Edition, 1738 (Reprint, Ibis Publishing). ハチスンのこの書のドイツ語訳 (Untersuchung unsrer Begriffe von Schönheit und Tugend) は1762年に出版されており、これをカントは所持していた。詳しくは浜田義文著『カント倫理学の成立』勁草書房、1981、10ページ参照。なお邦訳は、山田英彦訳『美と徳の観念の起源』玉川大学出版部、1983。
  - 9) F. Hutcheson; op. cit., p. 8. 邦訳、32ページ。
  - 10) Bd. V, S. 283.
  - 11) Bd. V, S. 281.
  - 12) ちなみにカント自身は反省概念について、『純粹理性批判』のなかで、それが多義的な概念であるとしながら、まず最初に上げるのは、「我々がそれのもとで概念に到達することのできるような主観的制約を見つけ出すために、ちょうど取りかかろうとしている心の状態である。これは我々の種々なる認識源泉に対する与えられた表象の関係の意識である。そして表象相互の関係はこの意識によってのみ正しく規定されるのである」というものであり、簡単に言えばある心の状態、ないし意識としている。Bd. III, S. 224f.
  - 13) Peter H. Nidditch (Ed.); John Locke: *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford U. P., 1982. p. 105. なおロックにおける観念と言葉の関係について注記しておけば、観念とは「人間が考えるときに理解の対象であるものを表すのに最も役立つ用語」(p. 47)であり、言葉は、心の中にある不可視的な観念の外的可感的記号 (extoernal sensible sign) であって、これによって初めて思想を他者に伝えることができる (p. 402) としている。ついでながらロックにおいては、美の観念は論題とされていない (わずかに色と形の観念を論じているところで「美や虹などの」とあるだけである)。
  - 14) F. Hutcheson; op. cit., p. XV.
  - 15) F. Hutcheson; op. cit., p. 4. なおハチスンの美論の概要については、前掲訳書の山田英彦の解説が要を得ており、美の観念については濱下昌宏『18世紀イギリス美学史研究』多賀出版、1993、第3章が詳しい。
  - 16) F. Hutcheson; op. cit., p. 6.
  - 17) F. Hutcheson; op. cit., p. 49.
  - 18) F. Hutcheson; op. cit., p. 52.
  - 19) F. Hutcheson; op. cit., p. 53.
  - 20) F. Hutcheson; op. cit., p. 66.
  - 21) ちなみに『判断力批判』のなかには、内感覚 (der innere Sinn) なる概念が2箇所でてくる。第17節 (Bd. V, S. 304) では、千人の成年男子の体格の平均的大きさを求めるのに、数学的に計測から平均値として算出できるが、「想像力はこれを、内感覚の器官上の形態の複合的把握から生起する力動的効果から得る」と述べられており、第27節 (S. 330) では、大きな空間の計測は継起的に捕捉されたものをひとつの直観に総括することを要するが、これは想像力の運動によって行われるとされ、その運動は「内感覚に対して無理を加えるような想像力の主観的運動である」と述べられている。いずれも内感覚は想像力に対応する感覚のように考えられており、その限りではヒュームの内感覚の概念を受け継いでいるとも考えられる (cf. David Hume; *Of the Standard of Taste And Other Essays*, The Library of Liberal Arts, 1965. p. 10)。  
なお1993年にベルギーとフランスで『判断力批判』を研究主題とした国際会議が開催され、下記の報告書が出版されている。Hermann Parret (Hrsg.); *Kants Ästhetik*, Walter de Gruyter, 1998. これは独・仏・英米の学者を中心とする最近の『判断力批判』の研究を集大成したものと言ってよいだろうが、収録された47編の論文のなかにハチスンとカントの関係に言及したものが一編もないのは不思議に思える。
  - 22) F. Hutcheson; op. cit., p. 4.
  - 23) F. Hutcheson; op. cit., p. 157, 162.
  - 24) Bd. V., S. 286ff.
  - 25) Bd. V., S. 272.
  - 26) Bd. V., S. 308.
  - 27) カントがスコットランドの常識 (Common-Sense) 哲学に通曉し、その影響をうけていたことについては、Manfred Kuehn; *Scottish Common Sense in Germany, 1768-1800*, McGill-Queen's University Press, 1987. の167ページ以下、特に199ページ以下を参照されたい。なお共通感覚 (Gemeinsinn, sensus communis) の概念はもともとアリストテレスに発するものであり、5つの感覚 (視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚) のほかに、我々は共通のもの (例えば運動、大きさ、数) を感覚する共通感覚 (koine aisthesis) を持っているとするが、しかしそれに対応する感覚器官を持っているわけではないとされている (アリストテレス、桑子敏雄訳『心とは何か』講談社学術文庫、1999。136~140ページ参照)。
  - 28) Bd. V., S. 310. なお Sollen には「当為」という訳語が当てられてきているが、ここでは「すべし」あるいは仮名書きで「ゾレン」とする。「当為」がわが国では日常用語ではないからである。
  - 29) Bd. V., S. 310, 367f.
  - 30) *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Zweiter Abschnitt. Bd. IV., S. 270ff.
  - 31) カントの道徳哲学に与えたハチスンの影響については、浜田義文『カント倫理学の成立』勁草書房、1981、の第三、四、五章および補論二に詳しい研究がある。
- 〔備考〕本稿の骨子にあたる内容は、平成12年10月8日の第51回美学会全国大会 (京都市立芸術大学) において「反省趣味と内感覚」と題して口頭発表した。